

自立支援教室を拠点にした児童生徒の社会的自立を目指す取組

～個々の実態に応じた学校との連携や登校支援を通して～

那覇市立仲井真中学校教諭 木村 江梨奈

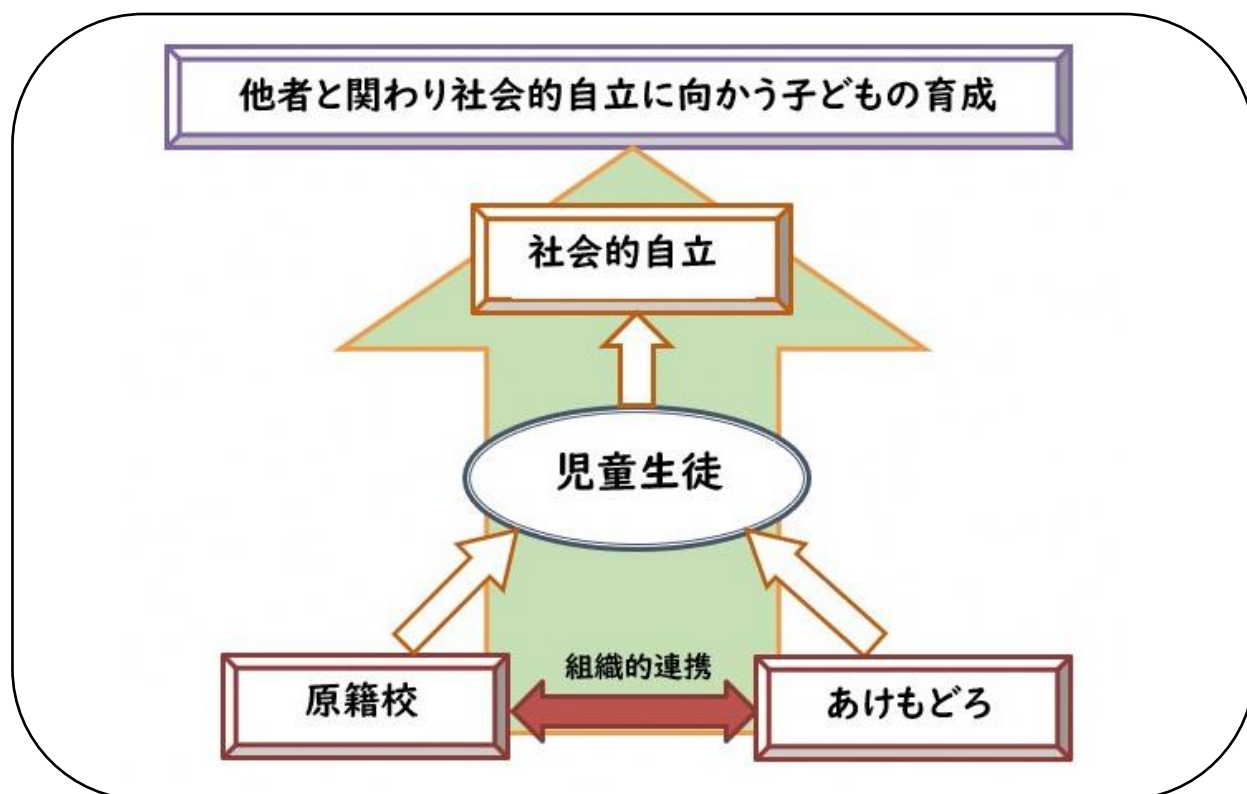
＜研究の概要＞

令和4年度、「不登校」とみなされた小中学生は、29万人を超え、過去最多となった。沖縄県の小中学生の不登校者数は過去最多で5700人余りに上り、小学校、中学校、高等学校のそれぞれの校種でも不登校者数は増加している。那覇市では、自立支援教室「あけもどろ学級」を設置し、心理的・情緒的な不安が要因で登校できない子どもたちを対象に安心できる居場所を与え、自主性や社会性の育成と人間関係の適応を図り、学校適応の促進及び社会的自立を目指している。

本研究では、個々の実態に合わせた学校との連携を自立支援教室がサポートすることで、学校は不登校児童生徒の現状や必要な支援などの理解が深まり、不登校児童生徒は、学校という場所に対する不安感が軽減され则认为した。登校復帰に向けて第一に、自立支援教室の通級が安定してから児童生徒に登校の意思確認を行い、第二に、登校支援計画を立て原籍校に出向いて情報共有や登校支援の確認と調整を行った。これら二つの方策により、前年度よりも登校日数も増え、登校時の課題にも意欲的に取り組むことができた。

Aさんの実践事例より、学校職員と連携することで登校支援が円滑に進めることができ、学校内の安心できる場所で継続して活動することができた。

＜研究のイメージ＞



目 次

I	テーマ設定理由	61
II	研究目標	62
III	研究仮説	62
1	基本仮説	
2	作業仮説	
IV	研究構想図	62
V	研究内容	63
1	自立支援教室「あけもどろ学級」の支援の実際	
(1)	体験活動	
(2)	生活日誌	
2	適応指導教室（教育支援センター）と学校との連携について	
(1)	適応指導教室（教育支援センター）とは	
(2)	沖縄県内の適応指導教室と学校との連携について	
VI	実践	65
1	自立支援教室「あけもどろ学級」の児童生徒の実態把握と学校との連携	
2	実践事例：Aさんの登校支援の実際	
(1)	Aさんに登校支援の意思確認	
(2)	登校支援計画	
(3)	登校支援に向けての学校との連携	
(4)	登校支援の実際	
VII	結果と考察	69
	作業仮説の検証 【結果】【考察】	
VIII	成果と課題	70
1	成果	
2	課題	

《主な参考文献》

自立支援教室を拠点にした児童生徒の社会的自立を目指す取組

～個々の実態に応じた学校との連携や登校支援を通して～

那覇市立仲井真中学校教諭 木村 江梨奈

I テーマ設定の理由

令和4年度児童生徒の問題行動・不登校等の生徒指導上の諸課題に関する調査結果(文部科学省, 2023. 10)より今回の調査において, 令和4年度の国立、公立、私立の小・中学校の不登校児童生徒数が約29万9千件(過去最多), そのうち学校内外で相談を受けていない児童生徒数が約11万4千人(過去最多), さらに90日以上欠席している児童生徒数が約5万9千人(過去最多)等の結果が明らかになった。

その中でも沖縄県の小中学生の不登校者数は過去最多で5700人余りに上り, 小学校, 中学校, 高等学校のそれぞれの校種でも不登校者数は増加している。また, 1000人当たりの不登校の児童数では, 沖縄県の小学生は25.3人と全国平均の17人を大きく上回り全国ワーストだった。高等学校の不登校の生徒数も前年度より240人増加している。高等学校の不登校者数も増えていることから, 義務教育から次の段階も踏まえながら社会的自立に向けて支援していくことが望ましい。

那覇市では心理的・情緒的な不安が要因で登校できない子どもたちを対象に安心できる居場所を与え, 自主性や社会性の育成と人間関係の適応を図り, 学校適応の促進及び社会的自立を目指すために, 教育委員会教育相談課の中に自立支援教室「あけもどろ学級」を設置している。

過去の研究データや引き継ぎ等から, 過去3年間の自立支援教室「あけもどろ学級」では, 登校復帰に重点を置くのではなく, 自尊感情や自己肯定感を高める工夫を行い子どもたちの心理的安定を図る居場所として機能していた。

今年度の自立支援教室「あけもどろ学級」の子どもたちは小中学生4名が在籍している。比較的通級も安定し、登校して定期テストの受験や学校行事の見学や参加等もできる児童生徒も多い。登校復帰のみに囚われる必要は無いが, 子どもたちの中には自立支援教室「あけもどろ学級」に5年目の在籍を迎えている生徒もいる。自立支援教室の中で, 自身の心理的安定を図ることができた次の段階として, 本人の気持ちを尊重しながら学校と連携し段階的に登校支援を進めていく必要性を感じた。また、実際に登校まで結びつかなくても学校との連携を密にすることで, 自立支援教室のみの支援ではなく, 個々に応じた支援体制を構築できる。

そこで本研究では, 個々の実態に合わせた学校との連携を自立支援教室がサポートすることで, 学校は不登校児童生徒の現状や必要な支援などの理解が深まり, 不登校児童生徒も学校という場所に対する不安感が軽減され则认为, 本テーマを設定した。

Ⅱ 研究目標

自立支援教室と学校との連携を円滑にしていくことで、学校と不登校児童生徒の相互理解が深まり、自立支援教室と学校での双方で個々の実態に応じた社会的自立に向けた支援を行うことができるように、見通しを持った支援計画を立てて登校支援を実践する。

Ⅲ 研究仮説

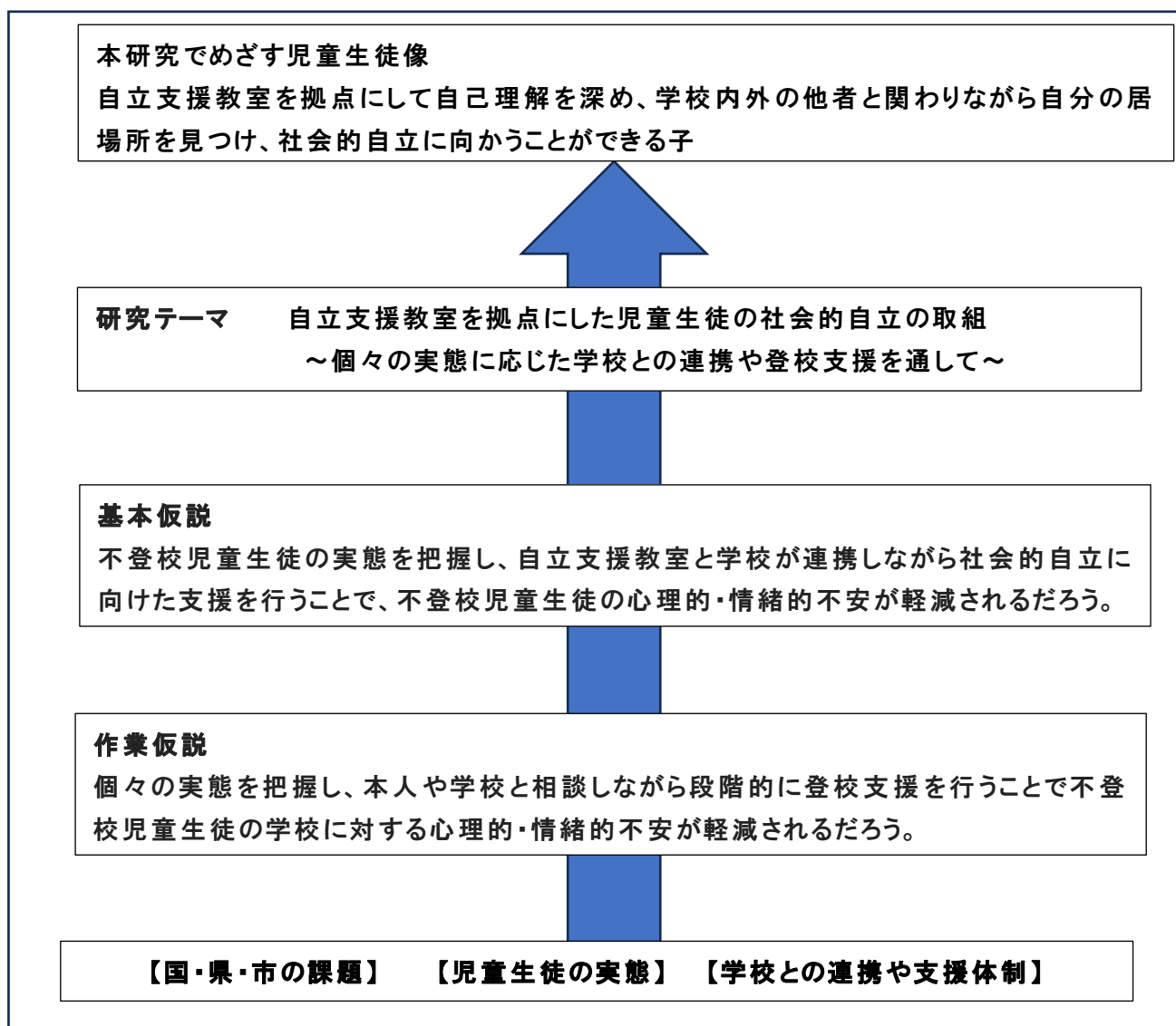
1 基本仮説

不登校児童生徒の実態を把握し、自立支援教室と学校が連携しながら社会的自立に向けた支援を行うことで、不登校児童生徒の心理的・情緒的不安が軽減されるだろう。

2 作業仮説

個々の実態を把握し、本人や学校と相談しながら段階的に登校支援を行うことで不登校児童生徒の学校に対する心理的・情緒的不安が軽減されるだろう。

Ⅳ 研究構想図



V 研究内容

1 自立支援教室「あけもどろ学級」の支援の実態

(1) 体験活動

自立支援教室「あけもどろ学級」内での活動は、学習活動、スポーツ、農業体験、ものづくりなどを取り入れて児童生徒と一緒に活動し交流する場を取り入れている。課外の体験活動では、沖縄県適応指導教室連絡協議会が主催する活動等に参加している。沖縄県適応指導教室連絡協議会主催の行事等では、他の市町村自立支援教室の児童生徒と交流をしながら体験活動を行っている。また、テスト受験や登校時に作品を製作したりすることがある。

表 1 あけもどろ学級の具体的活動内容

活動	具体的活動内容（例）	実施機関
学習活動	学校の課題・テスト、自主学習、知育ゲーム	あけもどろ学級、学校
ものづくり	木工作品、電子工作、裁縫、折り紙、調理	あけもどろ学級、学校、沖適連
スポーツ	球技、スポーツまつり、スポーツ交流会	教育相談課、沖適連
農業体験	契約農場にて野菜づくり	あけもどろ学級
宿泊体験	渡嘉敷島キャンプ宿泊	沖適連
自然体験	カヌー体験、海洋体験（シュノーケリング）	沖適連
歴史文化活動	平和学習、史跡巡り	沖適連



図 1 知育ゲーム



図 2 農業体験



図 3 ものづくり

(2) 生活日誌

児童生徒が通級時に生活日誌を記入している。起床時刻や就寝時刻、朝食の有無、通級手段などその日の体調確認などを自ら記入させることで基本的生活習慣を整えることを意識付けすることができる。今日の活動内容についての自己評価を取り入れることで、振り返りができるようになっている。自己評価の評価項目に、『他の児童生徒や先生と関わることができましたか』『発言や文章などで、自分の考えを表現することができましたか』などの評価項目を設定し、他者との関わりや自分の考えや気持ちを表現して活動することができるように工夫している。

児童生徒の中には、生活日誌の中に通級時の振り返りだけでなく、日常生活の出来事や自分の興味関心のあることを記入する場合もあり、自分の考えや気持ちを記すツールになっている場合もある。

2 適応指導教室（教育支援センター）と学校との連携について

(1) 適応指導教室（教育支援センター）とは

適応指導教室の当初の取り組みとして、通所を希望する不登校児童生徒への支援が中心だったが、近年は通所を希望しない児童生徒への訪問支援や不登校に関する学校へのコンサルテーションなど、支援の中核組織（センター）としての役割も求められるようになってきている。全国的にみると、通所を希望する児童生徒への支援を中心に行っている教室はまだ多い状況ではあるが、今後徐々に支援の中核組織としての機能を有した「教育支援センター」へと移行していくことが考えられる。

文部科学省は 2003 年 5 月（平成 15 年 5 月 16 日）の通知において、「適応指導教室については、その役割や機能に照らし、より適切な呼び方を望む声があったことから、国として標準的な呼称を用いる場合は、不登校児童生徒に対する「教育支援センター」という名称を適宜併用する」としている。そのため現在では、適応指導教室、自立支援教室、教育支援センターなど各市町村で名称が混在している。那覇市は、現在のところ適応指導教室を「自立支援教室」としている。

(2) 沖縄県内の適応指導教室と学校との連携について

那覇市を含めて、沖縄県適応指導教室連絡協議会に加盟している適応指導教室や自立支援教室は離島も含めて県内 14 教室である。加盟している適応指導教室の担当者で月に 1 回以上適応指導教室担当者連絡会が実施されている。

学校との連携について、各教室と協議し情報共有した主な現状と課題は以下の通りである。

表 2 沖縄県内の適応指導教室と学校との連携の現状と課題

【学校との連携の現状】	【学校との連携の課題】
・ 原籍校と会議や訪問などの情報共有（約 85％）	・ 学校が多忙で連携が取りづらい（約 46％）
・ チャレンジ登校や登校支援（約 77％）	・ 原籍校と学習課題の量や評価の調整など（約 46％）
・ タブレット端末を活用した情報の共有（約 46％）	・ 学校間での対応の差（約 31％）

上記の表 2 より、【学校との連携の現状】では、原籍校との情報共有やチャレンジ登校が 7 割以上を占めている。原籍校と情報を共有することで、チャレンジ登校や登校支援がしやすくなったという意見もあった。現在は、一人一端末の GIGA スクール構想が導入され、タブレットによる情報共有も不登校児童生徒の課題提出と同様に取り組まれる様になってきている。

また、【学校と連携の課題】で半数近くあがった意見として、学校が多忙で連携が取りづらい、不登校児童生徒の学習提出課題や学習評価の調整があげられる。適応指導教室担当者として、学校と密に連携していくことで不登校児童生徒の実態を相互理解することができる。沖縄適連の担当者連絡会の情報共有の中で適応指導教室と原籍校との連携方法でどの教室も取り組んでいるのが、課題や配布物のやり取りである。個々の児童生徒の実態では取り組むことが難しい内容や評価を出す寸前に課題を提示し、早急に課題の提出を求める等の意見も挙がっていた。

原籍校と適応指導教室が連携して児童生徒理解を深め、足並みを揃え、登校支援や登校復帰に向けて取り組む必要がある。

VI 実践

1 自立支援教室「あけもどろ学級」の児童生徒の実態把握と学校との連携

自立支援教室「あけもどろ学級」の4名の児童生徒の実態や学校との連携は表3の通り。

表3 児童生徒の実態と学校との連携

児童生徒名	不登校の理由	児童生徒の実態	学校との連携
Aさん (中3・男子) R5.6.16入級	・小学校の時からかい ・対人不安	・自閉症・情緒障害特別支援学級在籍。令和元年度から、あけもどろ学級に継続入級5年目を迎える。通所は安定しているが、具体的な登校支援計画が示されていないせいか、定期テストや面談以外では登校していなかった。 ・前年度はほとんどできていなかった学校からの課題も、受験を意識して提出できるように取り組んでいた。	・特別支援学級に対する障害受容ができていなかったため特別支援学級での活動が難しい。あけもどろ担当と週1回登校して、技術科の教科担当とものづくりをしている。 ・学習課題の提出や担任とのやり取りも技術室で行った。 ・定期テストや進路説明会、三者面談時は登校することができている。
Bさん (中1・男子) R5.10.3入級	・集団適応に課題	・自己表出は少ないが、質問にはしっかり答えられる。自分の考えや気持ちを伝えることができるようになってきている。 ・勤勉で学習課題など、出された課題に対しての意欲は高い。	・秋休みに1年生の技術科課題の木工作品を仕上げるため登校して、作品を仕上げている。 ・定期テストは学校の別室で受験している。
Cさん (中1・女子) R5.10.17入級	・対人不安 ・集団適応に課題	・あけもどろ学級入級前には、校内の適応指導教室に通っていた。 ・担任との関係は良好。担任の担当科目である国語が好き。	・定期テストは、校内の自立支援教室で受験し、給食も食べることができる。担任の声かけで、学校行事等にも参加している。
Dさん (小6・女子) R5.10.27入級	・担任との関係	・イラストや裁縫が得意。 ・当該年齢の児童と比べると、コミュニケーションに大きな課題が見られる。 ・学習面も当該学年の内容に取り組むことは難しい。	・担任と保護者との関係構築が円滑に進めることができるように、あけもどろ担当が担任と学習課題等のやり取りをしている。 ・中学校進学へ向けて、チャレンジ登校をスタートした。

2 実践事例：Aさんの登校支援の過程

今年度はAさん以外の児童生徒は、これまでに自立支援教室「あけもどろ学級」の通級が初めてで、10月以降に入級をしているため、実態把握と学校との連携までに時間を要し登校支援が実際にスタートしたのが1月末頃である。よって、Aさんの登校支援の実践事例を抽出する。

(1) Aさんに登校支援の意思確認

Aさん自身に、登校の意思を確認。Aさんは、人目につかない場所だったら登校できそう。体育館の横の技術室なら他の生徒と顔を合わせること無く登校できると本人に技術室の場所も教えてもらった。あけもどろ担当も、一緒に登校して実習のサポートをすることを約束してAさんを安心させた。技術室での活動内容として、まずはラジオを作ってみたいとのことだった。午前中はあけもどろ学級に通級し、午後の5,6校時の時間帯に原籍校の技術科教諭と時間を調整して登校支援を進めていくことにした。特別支援学級の教室に行くのは無理だと話していたので、登校時に担任への学習課題の提出や担任からの連絡等も技術室にて行うことにした。

(2) 登校支援計画

教育相談課内で登校支援計画の具体的な計画書やフォームが提示されていなかったため、原籍校の担任や技術科教諭と事前に相談しながら、本人の無理の無いように大まかな登校支援計画を立てた。本来、中学校3年生の技術科ではD領域「情報の技術」を履修するのが一般的だが、中学校1,2年で履修するA領域「材料と加工の技術」、B領域「エネルギー変換の技術」も不登校のためほとんど履修していない。D領域「情報の技術」はタブレット端末を使用して履修できるため、技術室で取り組んだ方が良い作業の多い、A領域「材料と加工の技術」から木工作品、B領域「エネルギー変換の技術」から電子工作を選択した。3年生が履修しているD領域「情報の技術」は、あけもどろ教室の通級時に課題に取り組むことになった。

表4 登校支援計画

時期	学校との連携	Aさんの活動
5月	・生徒の情報共有（担任・技術科教諭） ・登校支援計画の流れの確認（担任・技術科教諭）	・5月の連休明けから、プレあけもどろに通級開始。
6月～ 7月	・登校支援開始（担任・技術科教諭） ・あけもどろでのAさんの様子の共有（担任） ・教材の確認・研究（技術科担当教諭） ・登校支援時のAさんの様子の共有（担任・技術科教諭）	・電子工作 （はんだづけの練習） ・電子工作（ラジオ）
8月～ 11月	・あけもどろでのAさんの様子の共有（担任） ・登校支援時のAさんの様子の共有（担任・技術科教諭） ・実習の進捗状況の確認・教材研究（技術科教諭）	・電子工作（プログラム教材） ・木工作品（中文祭に向けて）
12月～ 2月	・あけもどろでのAさんの様子の共有（担任） ・登校支援時のAさんの様子の共有（担任・技術科教諭） ・実習の進捗状況の確認・教材研究（技術科教諭）	・電子工作（音響教材） ・木工作品（自由製作）

(3) 登校支援に向けての学校との連携

Aさんの登校支援は、6月からスタートした。登校支援に向けての学校との連携は以下の表の通り。担任と技術科教諭を中心に登校支援に向けて、登校支援日とは日程を別で設定し、原籍校に出向いて情報共有や登校支援の確認や調整を行った。

表 5 登校支援に向けての学校との連携

	月 日	登校支援に向けての学校との連携	具体的な内容
1	5 月 18 日	・ あけもどろ入級説明、生徒情報共有 (相談担当・担任)	・ A さんの近況報告 ・ あけもどろ入級書類配布
2	5 月 24 日	・ 生徒情報共有 (技術科教諭)	・ 生徒情報の共有
3	6 月 12 日	・ 登校支援後の情報共有 (担任・技術科教諭)	・ 登校支援の振り返り
4	8 月 14 日	・ 登校支援の教材研究 (技術科教諭)	・ 登校支援時の教材研究
5	9 月 22 日	・ 進路に向けての話し合い (担任・特別支援教育コーディネーター)	・ 進路に向けての連携の確認
6	9 月 30 日	・ 登校支援の教材研究 (技術科教諭)	・ 登校支援時の教材研究
7	11 月 6 日	・ 中文祭作品の進捗状況確認 (技術科教諭)	・ 登校支援時の作業計画の確認
8	12 月 11 日	・ 進路前の確認 (担任)	・ 入試前の情報交換
9	12 月 12 日	・ 登校支援の教材研究 (技術科教諭)	・ 登校支援時の教材研究
10	1 月 24 日	・ 受験後の情報交換と卒業に向けての確認 (担任)	・ A さんの進路に向けて情報共有

(4) 登校支援の実際

あけもどろ担当が行った登校支援以外にも、担任の声かけにより定期テストや三者面談、進路説明会等も参加している。夏休みなど長期間の休みに生活リズムを整えるため、本人の希望で技術科教諭と相談して登校日を設定した。また、担任以外にも学校長や生徒指導主事、特別支援学級担当教諭、特別支援教育コーディネーターや養護教諭など校内の先生方が技術室に A さんを激励するために顔を出してくれた。学校と連携し、令和 6 年 1 月までに登校支援を実際に行ったのは表 6 の通り。

表 6 登校支援の実際

	月 日	登校時の支援内容	A さんの様子や A さん自身の振り返り
1	6 月 8 日	・ 電子工作実習 (ラジオ) ①	・ 初めての環境で緊張していた。工具の使い方や基本事項の説明を聞いて、はんだづけの練習をした。
2	6 月 20 日	・ 電子工作実習 (ラジオ) ②	・ 電子部品を基盤に取り付ける。説明書を見ながら、技術科教諭と一緒に作業を行った。
3	7 月 6 日	・ 電子工作実習 (ラジオ) ③	・ 学校長、生徒指導主事、養護教諭からも激励をしてもらった。日誌に、先生方にも会えて良かったですと記述があった。
4	7 月 12 日	・ 電子工作実習 (ラジオ) ④	・ ラジオを完成させた。音が鳴った瞬間は、とても喜び、「ものが完成するって達成感がありますね」と下校する際に話していた。
5	7 月 19 日	・ 電子工作実習 (コロッケル) ①	・ はんだづけの作業は以前よりも上達して、作業が以前よりも早く正確に電子部品を取り付けることができた。
6	8 月 14 日	・ 木材加工実習 (中文祭) ①	・ さしがねを使って、材料にけがきを行った。真っ直ぐ線をひくことができた。両刃鋸の仕組みを学んだ。

7	8月25日	・電子工作実習(コロックル)② ・木材加工実習(中文祭)② ・先生のお手伝い	・プログラム教材を完成させた。端材を使って、鋸引きの練習を技術科教諭と一緒にいった。作業後に、タブレット保管庫の電池の取り替えの作業のお手伝いをした。
8	9月21日	・木材加工実習(中文祭)③	・端材を使って、鋸引きの練習。材料取り線から、はみ出してしまう。暑い中でも、材料を真っ直ぐ切断できるように集中して取り組んでいた。
9	9月27日	・木材加工実習(中文祭)④	・材料の切断の本番。技術科教諭に再度、アドバイスをもらいながら、一緒に鋸引きを行った。
10	10月3日	・木材加工実習(中文祭)⑤	・切断した材料の部品加工。やすりを使って、材料取り線まで削った。材料取り線を確認しながら丁寧に作業を進めていた。
11	10月19日	・木材加工実習(中文祭)⑥	・技術科教諭に帯鋸やベルトサンダーの使い方を教わり、材料取り線まで機械で加工することができた。機械の音などにも過敏に反応すること無く落ち着いて作業することができた。
12	10月26日	・木材加工実習(中文祭)⑦	・組み立ての工程に入る。端材で釘打ちの練習。真鍮は柔らかく曲がりやすいので苦戦しながらも、げんのうを使用し釘打ちをしていた。
13	11月1日	・木材加工実習(中文祭)⑧	・Aさんから、引き続き端材を重ね合わせて釘打ちの練習をしたいと要望があった。釘が材料に垂直に打てる様に、釘打ちの練習を行った。
14	11月7日	・木材加工実習(中文祭)⑨	・釘打ちを失敗するのを心配していた。失敗しても、修正できるよと声掛けをすると恐る恐る組み立ての工程に入った。
15	11月15日	・木材加工実習(中文祭)⑩	・木工用ボンドと釘を使って部品を接合した。部品を組み立てて形になったことで、作品の完成のイメージが見えて、達成感があった様子だった。
16	11月28日	・木材加工実習(中文祭)⑪	・アクリル板をホットナイフで切断した。パテを使って穴埋めをして、全体的に磨いて塗装準備を行った。塗装の工程に入ることができなかったのも、Aさんの希望で翌日も登校して作品を完成させることになった。
17	11月29日	・木材加工実習(中文祭)⑫	・中文祭の搬入までに時間がなかったため、速乾性のスプレーで塗装をして作品を完成させた。無事に中文祭に出展することができた。
18	12月7日	・電子工作実習(音響教材)①	・久しぶりの電子工作だったが、手慣れた手つきで工具等も自分で準備して実習に入ることができた。
19	1月17日	・電子工作実習(音響教材)②	・沖適連の活動展示報告会での展示に向けて、作品の完成に取り組んだ。



図 4 電子工作実習の様子



図 5 木材加工実習の様子



図 6 学級担任との関わり

VII 結果と考察

作業仮説の検証

個々の実態を把握し、本人や学校と相談しながら段階的に登校支援を行うことで不登校児童生徒の学校に対する心理的・情緒的不安が軽減されるだろう。

【結果】

前年度までは、定期テスト受験等で登校する時は緊張で体調不良を起こしていた。本人の体調不良時や定期テストなどを除き、一緒に登校すると約束し設定した日は登校することができた。定期テストだけで無く、進路説明会も体育館上のギャラリーから参加するなど、図 7 より登校日数も前年度と比較して約 2 倍になっている。学校に登校できる日数も増えてきたので、あけもどろに通級する日数は平均して 6 割だった。

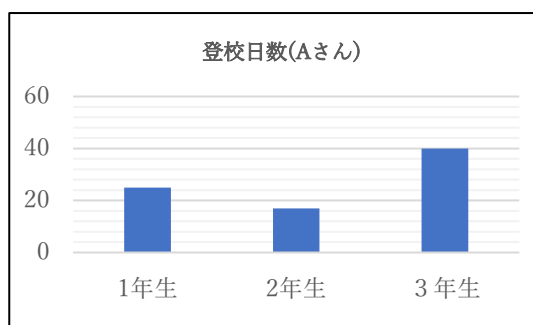


図 7 登校日数

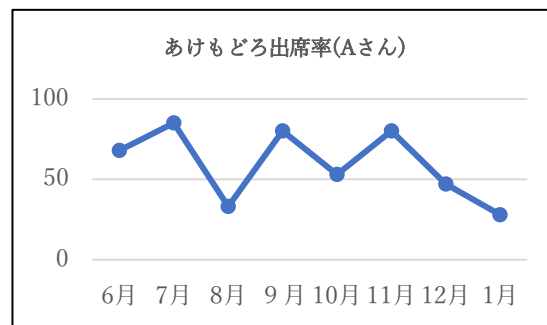


図 8 あけもどろ出席率

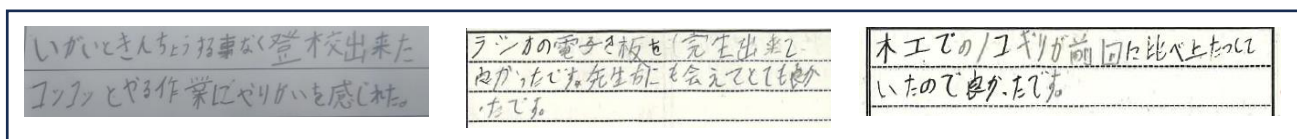


図 9 Aさんの生活日誌での記述（抜粋）

★木工作品をつくったときに、難しかった工程や楽しかった工程について書いてみよう。

ノコギリやクギ打ちが苦手で、が作業が進むにつれ上達出来た事がうれしかったです。

★中文祭に向けて、作品に取り組んだ感想を書いてみよう。

なかなかやるまでなの作業を行うのが大変でとても苦しかった。その中でノコギリやクギなどの使い方も学べたので、いい経験になりました。

図 10 Aさんのワークシートの記述（抜粋）

Aさんの生活日誌の記述からも、登校支援での課題に意欲的に取り組み、先生方に会えたり、作業にやりがいを感じたりすることができている。登校自体も本人が思っていたよりも緊張感を感じずに登校できたことが記述から読み取ることができる。ワークシートの記述からも、工具の使い方を学び、作品の完成までの工程に達成感を味わいながら継続して作業に取り組んだ様子が覗える。

【考察】

児童生徒の実態を把握し、登校復帰に向けて学校と連携して取り組むことで登校支援を継続して行うことができた。学校内外でも活動できるエネルギーをあげもどろ学級在籍の4年間で培ったことも登校して活動できることへと繋がっている。

Aさんに対して登校への意思確認や登校時の活動内容の確認を丁寧に行い、無理のない登校支援計画を立てることで、1、2年生の時に比べて登校日数が増えた。Aさんの生活日誌の記述からも意外と緊張することなく登校できた。コツコツとやる作業にやりがいを感じることもできた等、登校支援時の課題に対しての達成感も見られる。また、地区中学校文化祭に作品を出展するという目標設定をし、期日までに作品を完成させて賞状を貰いたいという気持ちも登校へのモチベーションアップになっていた。児童生徒の適性や取り組んでみたいことを事前に把握して、登校支援時の課題設定をしていくことも児童生徒の不安感を軽減し安定して登校できるようになる要因になると考えられる。

Ⅷ 成果と課題

1 成果

- (1) 学校職員と連携することで登校支援を円滑に進めることができ、Aさんと学校の先生方との交流を計画的に図ることができた。
- (2) 登校支援時に取り組んだ課題を中文祭に出展し、賞状を貰うという形にすることができてAさんの達成感に繋がった。
- (3) 学校内で教室以外の安心できる場所で継続して活動することができた。

2 課題

- (1) 途中入級(今年度は10月から3名)する児童生徒に対しての登校支援を含む十分な計画を立てることが難しかった。
- (2) あけもどろ学級と学校の連携を密にするためにアセスメントシートを活用して、児童生徒の願いに沿ったプランニングを構築していく必要がある。
- (3) 特定の学校職員や教科担当だけの登校支援にならないように、事前に学校との調整を綿密に行い、偏りのない登校支援にしていく。

《主な参考文献》

『不登校の理解と支援のためのハンドブック 多様な学びの場を保障するために』伊藤美奈子 2022

『沖縄県適応指導教室連絡協議会担当者連絡会資料』沖縄県適応指導教室連絡協議 2023

『教育支援センター（適応指導教室）に関する実態調査 結果』文部科学省 2019